平成 29 年度　茅ケ崎市バリアフリー基本構想推進協議会
第４回市民部会　会議録

議題	報告 （１）平成29年度第３回市民部会の振り返り （２）茅ヶ崎ユニバーサルスポーツフェスティバルの実施報告 議題 （１）取り組みを踏まえた普及啓発活動の成果と課題 （２）今後の進め方
日時	平成30年２月21日（水）　15：00～17：00
場所	茅ヶ崎市役所　分庁舎５階　特別会議室
出席者氏名	部会長　：斉藤　進 副部会長：海津　ゆりえ、藤井　直人 部会員　：篠原　徳守、水島　修一、柏崎　周一、太田　克之 瀧井　正子、上杉　桂子、鈴木　実、瀬川　直人 （欠席委員） 部会員　：五十嵐　優子、高野　幸子、湊　里香、矢野　竜也 （事務局） 都市部都市政策課
会議資料	資料１　平成29年度第３回市民部会　会議のまとめ 資料２　茅ヶ崎ユニバーサルスポーツフェスティバルの 　　実施報告 資料３　取り組みを踏まえた普及啓発活動の成果と課題 資料４　今後の進め方
会議の公開・非公開	公開
非公開の理由	
傍聴者数	なし

（会議の概要）

１ 開会

○関野課長：本日の会議について、部会員 15 名中 11 名の出席をいただいているので、要綱の規定にもとづき会議が成立している。

○斉藤部会長：議事録署名人は、鈴木委員にお願いする。

２ 報告

（１）平成 29 年度　第３回市民部会の振り返り

○宮崎主任：資料１（第３回市民部会　会議のまとめ）に沿って説明

○藤井副部会長：朝日新聞に、ダウン症の子が一人で外出する練習をするため、親ではなく大学生のボランティアに遠くから見守ってもらうことでうまくいったという記事があった。このようなことに知恵を絞っていくのもよいと感じた。

○上杉委員：そういう支援はすごくほしい。既存制度を活用した場合、支援者からは、すぐ傍にいないと危険が回避できない、という理由を言われてしまう。可能であれば、一人でできることは一人でさせるように見守ってほしいが、制度上そういった支援が受けられないことを残念に感じている。ボランティアの場合は、依頼しても必ずしも対応してもらえるわけではないので、日常的に利用するには不安定さがある。支援者が常に張り付いている必要のある人もいると思うので、段階的に様々な形の移動支援があるとよい。

○篠原委員：心のバリアフリーは時間のかかるテーマである。こういった項目も取り上げながら長期的に展開できるとよい。

○斉藤部会長：地域において、普及啓発に関するきっかけはないか。

○篠原委員：「あいさつ運動」と「ひと声運動」を広めようと議論している。誰かが見守っているという状態を地域に広げなければいけないという話をしている。ソフト面については時間を要するため、根気よく取り組んでいく必要があると感じている。

○海津副部会長：「心のバリアフリー」という言葉は浸透してきているが、言葉と行動にギャップがあると感じている。日常的に活動を行う必要があり、例えば NPO のような団体ができるということも一つの方法であると思う。

○斉藤部会長：心のバリアフリーについて、理解が先か行動が先かは明確ではないが、何かしらの取り組みを積み重ね、繰り返していく中で変わっていくこともある。

○海津副部会長：他の事例であるが、外国人観光客が日本語を話せないことに対して、サポートをしやすくするために若者が「ask me!」という団体を東京で立ち上げた。このように、一言「私は大丈夫です」という意思表示を行い、相手から話

しかけてもらうこともアイディアであると思う。

〇藤井副部会長：交通事業者の教育について、運転手は当事者に会っていないことに加え、話もしていないのが現状である。教育の場面を作って交流し、慣れてくることで対応は異なってくると思われる。

〇鈴木委員：当事者は「声をかけてくれ」と言うが、健常者からするとどうやって声をかければよいのか、当事者なのかどうかもわからないため声をかけられないと聞くので、我々は、どうやって声をかけてほしいかをどんどん発信している。昨年のホーム転落事故を受け、大々的にキャンペーンを行ったことにより、声をかけてくれる人が大分増えている。「声をかけてくれ」と言うだけでは、進んでいかないと感じている。

〇斉藤部会長：ホーム転落事故の後に視覚障害の方に話を聞いたが、声をかけられることが多くなったと言っていた。事故が起きてからではなく、日常的に声かけが行われることが望ましい。

〇太田委員：ユニバーサルスポーツフェスティバルが開催されたが、年に１回である。外に出て遊べる場所が非常に少なく、外出機会も少ないのが現状である。スポーツフェスティバル等を年に数回と増やすことで、外出機会を増やすこととなる。

〇斉藤部会長：大々的にやるよりも、小さな取り組みの繰り返しが今後は重要になるかもしれない。時間をかけながら取り組んでいく上での課題があることが確認できた。

（２）茅ヶ崎ユニバーサルスポーツフェスティバルの実施報告

〇宮崎主任：資料２（茅ヶ崎ユニバーサルスポーツフェスティバルの実施報告）に沿って説明

〇斉藤部会長：当日来場いただいて感想などがあればお願いします。

〇水島委員：小学生等への案内をすることで参加者が増えたということだが、小和田公民館においても視覚障害者と点字体験などのイベントを実施した際に、周辺の学校に案内することで多くの参加があった。当日は近くでヴェロフェスティバルが開催されていたが、同日開催の効果はあったのか。

〇宮崎主任：当日は朝から強風でテントが倒れるなどの問題により、ヴェロフェスティバルの開始が遅れたため、そちらに行こうと思っていた人が案内を見てユニバーサルスポーツフェスティバルに来たという状況はあったようである。ただ、ほとんどの人は運動のできる格好で来ていたので、概ねこのイベントを目的に来たという印象であった。

○水島委員：今回のイベントは多くの人が来た成功例だと思うので、他の取り組みにも活かせるとよい。

○宮崎主任：写真で当日の実施状況（当事者と子どもが一緒に楽しんでいる様子や世代を超えた交流、スタッフが親切丁寧に対応していたことなど）を説明

○鈴木委員：視覚障害者福祉協会では、サウンドテーブルテニスと点字体験を実施した。サウンドテーブルテニスの参加者は 52 名であり、前年度の約 2.5 倍となった。多目的室に会場を変更し、静かな環境でできたのは良かったが、参加者に会場の存在を気づいていただけたか懸念している。52 名ということは、1 時間あたり約 10 名参加したということである。一人あたり説明も含めて５～６分の体験ということで、もう少し来ても大丈夫な状況だった。点字体験は当事者２名とボランティアで対応し、点字作成用の機器なども置いており、興味を持ってもらえた。パネルも見てもらえたと聞いている。来年度もまた実施できるように検討していけるとよい。

○宮崎主任：サウンドテーブルテニスについては、参加者に案内図を配付し、あわせて多目的室出入口に２ｍ～３ｍ程度の大きな横断幕を掲示した。横断幕は背景の壁面と同色であまり目立っていなかったのは反省点である。

○太田委員：私も卓球の会場で対応したが、卓球の競技を終えた人へサウンドテーブルテニスの案内をしたところ、そちらの会場に向かった人もいた。卓球に興味がある人はサウンドテーブルテニスにも興味があるという前提で案内した。来年も、卓球を待っている人への案内や声かけができると、参加者が増えると思う。

○上杉委員：結果を見ると、参加者が増えていてすごいと思った。アンケートの回答率も驚異的である。声かけなどをどのようにやったのか教えてほしい。周知についても、チラシがフルカラーで子ども受けしたことや、申込み不要であること、子ども一人一人に渡したことは絶大な効果であった。各団体に 20 枚程度渡して配布してもらう方法では、受け取った側が一番困るので今回の配布方法は非常によかった。

○海津副部会長：アンケート対応は、学生が受付で待ち構えて、回答のお願いを丁寧にしていた。参加していた子どもたちには回答したいという気持ちがあった。

○瀧井委員：回答者に飲み物を配布していたので、積極的に回答してもらうことができた。

○上杉委員：チラシは福祉関係の人にも配っていただいたが、当事者の参加は全体の１割程度であった。当事者は、一般向けのイベントや健常者が混ざっているイベントには足を運びづらいということも改めてわかった。当事者が、日常的に福祉の環境に囲われて生きてきていることが影響しているのかもしれない。これは福祉側の問題である。

○瀬川委員：今回、小さな事業所にもチラシを渡しに回ったが「このようなチラシを持って来られても困る。」という事業所が１か所あった。土曜日の事業の支障となると言われて驚いた。福祉側も問題があるということはもっともだと感じた。

○柏崎委員：サウンドテーブルテニスを体験し、鈴木委員にはまったく敵わなかったが非常によい経験をさせてもらった。イベントは大勢の人が参加して、ユニバーサルスポーツという点ではとてもよかったが、本当に当事者と健常者が交流できたのかが疑問である。サウンドテーブルテニスはまさに交流であり、ボッチャにおいても交流できているように感じたが、他のスポーツでは交流している姿はあまり見られなかった。当事者と健常者が一緒に何かをできることについて工夫ができるとよいと感じた。

○藤井副部会長：鈴木委員の素晴らしさが際立っていた。一流の選手が相手では歯が立たないため、交流とならない可能性がある。主催者側として競技に参加できる当事者も増やしていく必要がある。

○瀧井委員：すぐに交流ができなくても、同じ空間に様々な人がいて「一緒にゲームをしている」と思えることが第一歩であると思う。総合受付では、サウンドテーブルテニスのことは具体的に案内しなかったため、別会場の旨をしっかり説明した方がよいと感じた。点字体験は、会場の混み具合に応じて案内することができた。チラシについて、個人配付の効果があると感じた。ユニバーサルスポーツフェスティバルの反省会では、当事者の参加はそれほど増えていないので、当事者の掘り起こしが課題という話があった。特別支援学級や特別支援学校にも配布されたが「一緒に行こう」と声かけすることが大事である。昨年来ていた人は今年も来ている。配布数とは連動しないので、そういった声かけにより少しずつ参加者が増えていくと思う。

○海津副部会長：チラシの配布方法は、来年以降も同様とするとよい。繰り返していると、５回目くらいから効果が表れることもある。正直なところ、基本構想のパネル展示はほとんどの人が見ていなかった。当事者や子どもが書いたポスターなど、参加者の取り組みがそこに展示されているとよい。

○鈴木委員：サウンドテーブルテニスにおいて、76 ㎝の卓球台から顔も出ないような背丈でも一生懸命やっている子がいて微笑ましかった。また来年も来ようという気持ちになってもらえるとよい。子どもたちへの周知はよいと思った。

○斉藤部会長：１回で 100％の成果は出ないので、段階的に積み上げていくことが必要である。また、強制的に伝えるのではなく、関心を呼べるものを展示することが必要である。ぜひ今後も継続して、段階的に交流を深めていけるよう、展開していきたい。

３ 議題

（１）取り組みを踏まえた普及啓発活動の成果と課題

〇宮崎主任：資料３（取り組みを踏まえた普及啓発活動の成果と課題）に沿って説明

〇斉藤部会長：茅ヶ崎ユニバーサルスポーツフェスティバルで実施したアンケートの分析を行い、傾向を把握した上で、普及啓発活動の成果と課題をまとめた。

〇上杉委員：大変参考になった。５ページの「来場の際に苦労を感じている人が少ない」ということから、苦労するところには行かないということもわかる。よく行く、行きたいイベントでは、選択肢が多い場所が行きやすいということがわかる。６ページの他人との会話については母数が小さいが、知的・精神・発達障害の方の会話がやや少ないようであり、見た目でわからないような障害だとコミュニケーションが難しいのではと感じたので、会話の橋渡し役がいるとよい。７ページのイベントの周知媒体について、当事者に関してはロコミが主であるということで、いかに人のアプローチが大事かわかった。ＳＮＳでは目的にたどり着くまでにページを開いていくという煩雑さがあり、そのプロセスが当事者には難しい。言葉の浸透は進んでいるが行動に移すのはハードルが高いという話があったが、子どもがたくさん来たことは一つの可能性を感じた。啓発をどこからやろうかというと最終的にたどり着くのは教育となる場面が多い。社会性の問題を抱えた人には、柔軟な心を持った子どもと接点を持つことが必要で、そのためには工夫が必要である。最初は瀧井委員が言うように接点があることが大事だが、段階に応じて適切な対応が必要であると思う。

〇斉藤部会長：課題はよくまとまっていると思う。意見を踏まえて今後の展開につなげたい。段階的な対応が必要なのは同感であり、具体的な方策を段階ごとに少しずつ積み上げていくことが大事である。

〇藤井副部会長：４ページの来場手段について、当事者の中で神奈中バスを使っている人は多いが、それに対してコミュニティバスの利用者がいないのは、交通事業者への接遇教育に問題があるのではないかと想像してしまう。接遇についてどういう状況か把握したい。５ページのイベントで行きたい（よく行く）ものについて、健常者は断トツで花火大会に行っているのに対し、障害者があまり行っていないことには何か原因があるのではないかと思うので、どのようなバリアがあるのか把握する必要がある。７ページの周知媒体について、チラシの配布が効いており、子どもと親という組み合わせの参加者が非常に多かった。障害者はチラシよりロコミでの参加が多いということであったため、当事者の方に効率的に届く情報提供手段を研究しなければならない。参加して感じたのは、

楽しかったということと、係の人が親切で競技に加わるように誘導してくれてよかったということである。市民にとってもよいチャンスであったと思う。当事者が入り込んでいることにユニバーサル性があった。また、ボランティアスタッフに障害教育をするのは効率的ではないか。

○上杉委員：施設にチラシを配布しても、当事者に渡さない場合がある。渡すと行きたくはなるが、支援を得られないといけない人に渡すと困ってしまうことがあり、逆に苦しませてしまうことになる。チラシを配るだけだとそういう問題がある。

○斉藤部会長：チラシを配るのであれば、外出を支援する仕組みも作らなければならない。施設の介助者の場合、配布すると自分が支援する必要性を考えてしまうといった問題がある。

○上杉委員：コミュニティバスの利用者がいなかったという話があったが、駅周辺に向かうには神奈中バスを使い、横断的な移動の際にはコミュニティバスも使うといった位置的な問題があるのではないか。

○太田委員：コミュニティバスは、市立病院が発着や乗り継ぎの拠点となっている。路線バスの通らないところを埋めるように走っており、路線は４コースあるが、病院を拠点として路線バスが走らない場所を通っているため、駅周辺へ行くには路線バスを使うよりも遠回りになってしまう。コミュニティバスの運転手は、非常に丁寧に対応してくれている。車いすで里山公園に行くこともあるが、車いす使用者でもちゃんと対応してくれている。今回のイベント会場である体育館の利用には不便であっただけではないか。

○藤井副部会長：イベント参加者の住まいは全市的であり、利用する施設は駅周辺、ということは、コミュニティバスはニーズにマッチしていないということか。

○太田委員：コミュニティバスは不便なところの移動を支援しているもので、路線バスとは路線設定の目的と趣旨が違うと思う。

○鈴木委員：コミュニティバスは目的地の近くに停留所があると使いやすいが、国道１号以南の人が市役所周辺に行くのには使いにくい。駅で時間調整のため停車時間が長いことがあり、バスの本数も１時間に１本～２本で、行きたい時間とバスの時間が合わないのが現状である。

○関野課長：みなさんが言うように、北側のコミュニティバスは本数が少ないため、一般の路線バスを多く利用いただいていると思う。運転手については、共通して神奈中バスの運転手なので、コミュニティバスと神奈中バスで同じであると認識している。

○瀧井委員：５ページで、行きたい（よく行く）ものという聞き方をしている。当事者に

とっては行きたいけど行けないものがある。花火大会については行きたくても行けないので差が出ているのではないか。決して関心がないわけではないと思うので、手段があれば行きたい人は多いと思う。

（２）今後の進め方

○宮崎主任：資料４（今後の進め方）に沿って説明

○上杉委員：市議会と福祉団体との意見交換会において、ユニバーサルデザインとバリアフリーの言葉の意味の違いについて議員から質問があった。バリアフリーはそれぞれの障害に特化した後付けの対応を行うことで、ユニバーサルデザインは予めすべての人に使いやすいデザインにすることという違いがある。どちらがよいかという質問に対し、私も含め２名がバリアフリーがよいと回答した。みんなのトイレはユニバーサルデザインであるが、ユニバーサルデザインとすると困る人がいるので、それぞれの障害に適応した形がよい。ユニバーサルデザインであると、当事者が妥協しないといけない場面がある。

○斉藤部会長：当事者と健常者で対話を重ねることが必要である。私からすると、ユニバーサルデザインとバリアフリーの言葉はどちらでもよい。むしろ取り組みを通して誰にとっても住みやすい社会を考えればよい。そのような社会を作っていく上で、もっと以前の段階の質問ではないか。対話を繰り返し伝えていくこと。まだまだ十分知られていないことが多いので、対話していくこと。言葉の定義を伝えても、知識だけがついて理解にはつながらない。

○藤井副部会長：ユニバーサルデザインには、アメリカの差別禁止法（ADA）で障害者の物理的なバリアを解消することが法律で定められたことが発端である。法律の施行により、多数の訴訟があると想定され、それを回避するために今後社会に出て行く学生に対し、最初からバリアのない設計に配慮することを教え込むために考えたものが、ユニバーサルデザインの始まりと聞いている。

○上杉委員：バリアフリーであることが助かるが、ユニバーサルデザインに寄せていかないといけないという葛藤をどう処理すればよいのかわからない。

○斉藤部会長：最終的には人権ではないか。本質は差別禁止だが日本では差別解消法となっている。ユニバーサルデザインかバリアフリーかというより、ユニバーサルな社会を考えていくことが重要ではないか。言葉にこだわる必要はなく、問題を共有して改善していけばよいと考える。

○藤井副部会長：心のバリアフリーについては難しい問題である。ドイツに行った際、車いす使用者が来たらエレベーターに並んでいる人が一斉に譲ってくれたという場面があった。どのように意識を浸透させていくかが課題である。障害者用

のトイレについて、当事者にトイレの鍵を配った国もある。適正な使い方をしてもらうために、市民理解をどうつくるかが課題である。

○斉藤部会長：問題を市民化して、次の改善につなげていくことが必要である。誤解や失敗があっても構わないので、改善されるように議論を深めていきたい。

○柏崎委員：心のバリアフリーの委員会なので、ユニバーサルデザインについては置いておいてよいのではないか。私もこの会議で話を聞いて少しわかってきたが、一般の人はバリアが何かもわかっていない。問題を表に出していくことが目的ではないのか。当事者と健常者が一緒にスポーツをするだけではなく、対話して理解していくことを少しでも進めることが大事であると思う。これまでも話があったサロンのような交流がなければ、バリアはなくならない。次年度は、心のバリアについて話せる場を作りたい。

○斉藤部会長：今の話を聞いていて、柏崎委員も当初に比べて問題意識を深めていることがわかる。即効性のある方法はないので、問題意識を深め、段階的に取り組み理解を深めていきたいと考える。

○柏崎委員：私もどこまで関わってよいかわからない。過去に、当事者に関わって怒られたこともあるが、怒らないでその理由を説明してほしい。一度拒絶されると、次にアプローチしにくくなってしまう。具体的な悩みを聞きながら、どうすればよいか共有していきたい。

○斉藤部会長：心のバリアフリーに関しては、社会がまだ入口にあるという意識でこれからも積み上げていきたい。本日の議論を踏まえて、今後の取り組みとして実施したいことの考えがあれば、事務局に伝えていただきたい。

○宮崎主任：今年度の市民部会は本日で最後であり、３月中に全体の協議会を予定している。４月早々に次回市民部会を設定したい。次の協議会までに意見をいただきたい。

○斉藤部会長：３月１６日までに事務局にご連絡いただくようお願いしたい。

4　その他

○特になし

5　閉会

部会長署名　斉藤　進

部会員署名　鈴木　実